

海外短訊：

ICANASおよび米国での宋代史 シンポジウムに参加して

岡 元司

2000年8月26日から9月10日にかけて、日本の宋代史研究者計10名の一行は、カナダ・モントリオールにおける第36回 International Congress of Asian and North African Studies (略称ICANAS)、および、米国・ボストンのハーバード大学と同・ロサンゼルス校のUCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)でのシンポジウムに参加した。10名とは、伊原弘氏(日本大学)を団長、小島毅氏(東京大学)を秘書長として、浅見洋二(大阪大学)・市来津由彦(広島大学)・遠藤隆俊(高知大学)・緒方賢一(大阪市立大学)・須江隆(日本大学)・田中正樹(山形女子短期大学)・平田茂樹(大阪市立大学)の各氏(50音順)および私である。また、ICANASの道教関係のパネルで報告をされた土屋昌明氏(専修大学)夫妻と森由利亜氏(早稲田大学)もボストン、ロスに同行していただいた。

我々がこうした計画を立てた背景には、中国および英語圏での宋代史研究において、近年、日本の宋代史研究が参照される割合が減ってきているのではないかとの危惧があった。そして、1997年にブダペストでおこなわれた第35回ICANASにて外国人研究者と共同で組んだパネルでの発表から帰国した伊原弘氏が、今回のICANASにて宋代史のパネルを組むことを提案し、その呼びかけに応じたのが、このメンバーであった。そして準備の過程で、アメリカ大陸に渡る貴重な機会を利用してICANAS終了後に米国に立ち寄り、2か所にてシンポジウムを催すことが、ハーバード大学のピーター・ボル氏、およびUCLAのリチャード・フォン・グラーン氏との交渉の

中で決まった。

これら一連の学会・シンポジウムについては、団長の伊原弘氏が近く『東方学』に参加記を掲載する予定となっているので、ここでは、私自身の個人的な感想をまじえつつ、合計16日にもわたった「長征」(と我々は呼んでいた)の回顧を記すこととしたい。

* * * *

まず、8月27日から9月2日の間、モントリオール・コンベンションセンターで開催されたICANASでは、“Research into Song History through Consideration of Source Materials”という共通タイトルのもとに、宋代史の2つのパネルがもうけられた。報告の題目は、以下の通りである。

1. “*The Genesis of Discourse*”

(August 29 9:00AM-10:30AM)

Chair: IHARA Hiroshi

* ENDO Takatoshi “To My Dear Elder Brother: Fan Zhongyan's Letters”

* SUE Takashi “What Do Inscriptions Tell Us?: The Discourse Found in the Records of Temples”

* OGATA Ken'ichi “Introductions for Posterity: The Reconstruction of Kinship”

* KOJIMA Tsuyoshi “Recorded and Reproduced Texts: A Case Study of Zhen Dexiu”

2. “*Searching for New Methods*”

(August 30 4:00PM-5:30PM)

Chair: OKA Motoshi

* HIRATA Shigeki “How to Analyse Political Material: A Preliminary Survey”

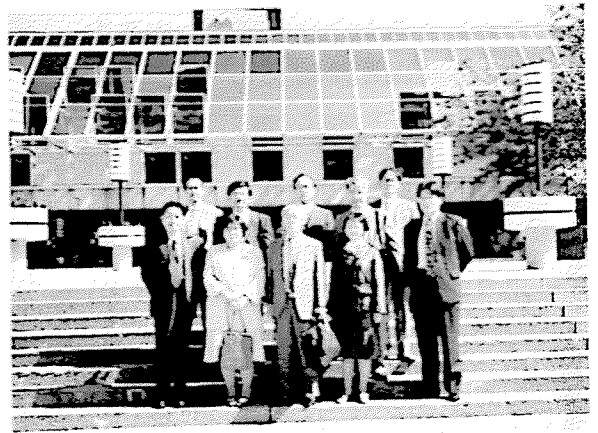
* ICHIKI Tsuyuhiko “The Value of Zhu Xi's Letters as Historical Material: A Viewpoint from Research into the History of Thought”

* TANAKA Masaki “The Su Family Shu School: As Seen through Publication”

* ASAMI Yoji “The Study of Poetry as Historical Source Material: Focusing on the Terms ‘Poetic History’”

これらの8本の報告は、いずれも史料をいかに読むかということを通じて、宋代史の新たな側面の解明を試みたものである。すなわち、その意図とは、単に史料の漢文を正確に読むということだけでなく、その史料が宋代の当時において、いかなる用いられ方をしたものであるか、いかにして読まれていたかを踏まえうえでの分析をおこなうということである。また同時に、それが学際的なアプローチとも重なるものであることは、報告者および座長の計10名のもともとの専攻が東洋史5名、中国哲学4名、中国文学1名に散らばっていることにも示されているように思う。

我々はこの2つのパネルのために、英訳のフルペーパーを用意し、また、1982年以後の日本の宋代史研究に関する研究史整理（英語）および文献目録（大阪市立大学大学院の加藤昌氏、福井信昭氏、安田純也氏、山口智哉氏による作成）をまとめ、いずれも冊子として配布した。いささか手前味噌の言い方ではあるが、他のパネルに比べて、かなりの労力をつぎ込んだ準備をおこなったつもりである。そのためもあってか、両パネルとも、報告に続いて活発な質疑応答がおこなわれた。私自身が座長をつとめた第2パネルに限っても、バーモント大学のジーン・シー氏から、「あなたがこの世代がこうした研究を通して、どのような見方を提示しようとしているのか」との質問が出されたのはじめ、宋代史のベティンヌ・バージ氏（南カリフォルニア大学）や、同じICANASで濱下武志氏らとの近代社会経済史のパネルで報告していた李培徳氏（香港大学）など多彩な顔ぶれのかたがたからの質問をいただいた。いずれも、瑣末な質問よりは本質的な質問が多く、報告者たちも正面からそれに答え、充実した議論が展開されたように思う。



モントリオール・コンベンションセンター前にて

* * * *

9月3日にモントリオールからボストンへと移動した我々は、9月5日、ハーバード大学にて、朝、まずはハーバード・燕京図書館を見学したあと、午前10時からクーリッジ・ホールでのシンポジウム“Middle Period Chinese History and Its Future”に臨んだ。当日の内容は下記の通りである。

* Opening Remarks/Introductions

* IHARA Hiroshi “Emerging Perspectives on Song Local History”

* OKA Motoshi “Openness and Exclusiveness: Personal Ties among the Elite of Southern Song Wenzhou”

* Robert Hymes ‘comments on the papers’

* Peter Bol “Context and Intellectual Change: A Periodization Problem”

* Responses from the Visiting Scholars and General Discussion

ここに示されているようにシンポジウムでは、伊原弘氏と私による宋代地域社会史の両報告に対し、ロバート・ハイムズ氏（コロンビア大学）がコメントをつけ、その後でピーター・ボル氏が報告し、最後に全体討論をおこなうという順序でおこなわれた。

ハイムズ氏は、言うまでもなく、1986年の大作 Statesmen and Gentlemen によって知られ、米国の宋代地域社会史研究の第一人者といつてよいであろう。しかし遡れば、ハイムズ氏の研究においては、宋代の婚姻関係についての伊原 弘氏の論文が重要な先行研究としての位置を占めており、またシンポジウムでもハイムズ氏自身が「伊原氏の研究からかなりの恩恵を受けた」と述べた。したがってハイムズ氏も、事前に伊原氏と私のペーパーを読み込んだうえで、コメントとしては非常に長い1時間以上をかけ、墓誌銘について自身で調べたデータなども紹介しつつ、周到なコメントを述べられた。こうした点で、伊原氏・ハイムズ氏より若い世代に属する私にとっても、滅多にない貴重な機会を得ることとなった。

私自身、ここ数年、宋代地域社会史研究を進めてきた中で、ハイムズ氏の著書も、大きな刺激を受けた研究のうちの1つである。ただし当然ながら、学問的な「影響」というものは、ある研究者の方法を別の研究者がそのまま取り入れるというのではなく、そこには、相互の「批判」も伴うものであろう。伊原氏も私もそれぞれのペーパーの中で、ハイムズ氏とのズレ、あるいはハイムズ氏への批判もおこなった。それに対しハイムズ氏も、きわめて懇切丁寧な回答を寄せた。そして、ハイムズ氏が分析した撫州を南宋地域社会の典型と見なし得るのか、南宋におけるエリートの活動の「地域化」「国家からの乖離」という論点は果たして妥当かなどの点をめぐって、互いの見解を提示しあった。

ハイムズ氏がコメントの最後で「建設的な議論をしたい」と述べた通り、幸いなことに、討論が互いの揚げ足取りに陥ることなく、南宋のエリートをめぐる社会史研究について、これまでのどのような点が受け継がれるべきであり、また同時に、どのような点が今後さらに検討を要する問題であるかが、こうした意見交換を通して鮮明になった

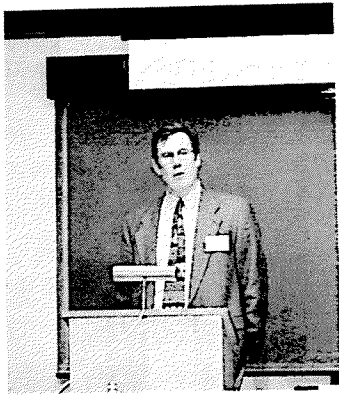
ように思う。また、ハイムズ氏自身も「ネットワーク」に関心をもち、この点についての学問的状況について幾つか紹介をおこなっていただいたのも有益な情報であった。

以上は私自身の研究に深く関わる部分であるので、少し詳しく記したが、ボル氏の報告も、唐宋変革の時代区分の問題を宋代思想史の立場から見直す意欲的なものであった。これについては、王安石の位置づけをめぐって、ボル氏とは異なる見解が平田茂樹氏、小島 毅氏から出され、やはり白熱した議論が展開された。

討論は、予定の午後5時を大幅に過ぎて午後6時近くまで続いたのだが、今回のように、ほとんど宋代史の研究者ばかりの50名余りが集まり、これほどまでに密度の濃い議論がおこなわれたシンポジウムは、少なくとも私にとっては初めての経験であった。しかも、議論の焦点が、時代区分や地域社会史の捉え方など、いずれも宋代史にとって重要な問題ばかりであり、たいへん有意義であったと感じた。東海岸を中心に多くの一線級の宋代史研究者を招いてくださり、また米国側の主要参加者と我々日本側の参加者の研究業績目録をまとめた“Participant Information”という冊子までつくってくださったボル氏の、念入りの準備によるところも大きいと思われる。



右から伊原 弘氏、筆者、ロバート・ハイムズ氏



ピーター・ポルク氏

* * * *

ハーバード大学でのシンポジウムから一夜が明け、ボストンの街を楽しむ間もないままに、9月6日は飛行機でロサンゼルスへと向かった。ミネアポリスまで3時間、乗り継いでロスまで4時間、アメリカ大陸の大きさを実感しながらの移動となったが、上空から見た砂埃の中に立つロサンゼルスの高層ビル群の印象とはうってかわって、郊外にあるUCLAは、レンガの建物と豊富な緑の、まさに絵に描いたようなキャンパスであった。

UCLAでのシンポジウムは、西海岸スタイルとでも言うべきか、ほとんどの参加者がネクタイをはずして、少しラフな服装になってフランクな気分での討論を重視しておこなわれた。米国側の参加メンバーは、宋代社会史のビバリー・ボズラー氏(カリフォルニア大学デービス校)、明清史のベンジャミン・エルマン氏(UCLA)、文学のステファン・ウェスト氏(カリフォルニア大学パークレー校)、前出のベティヌ・バージ氏をはじめとして、錚々たる顔ぶれであった。タイトルは、“Song-Yuan-Ming Transition”で、主として宋から後の時代へのつながりをテーマとして、9月8日午後3~6時におこなわれた。内容としては、まず、ICANASに持参した研究史整理の冊子を軸に、思想史・文学史の部分の小島毅氏が、政治史・社会史の部分の遠藤隆俊氏が要約しながら、宋から明への移行の問題を解説した。また、近年

の日本における具体的な研究例として、ICANASの報告のうち、浅見洋二氏・須江隆氏の報告が再度おこなわれた。

討論では、個別の質問以外に、唐宋変革と、宋代から明代への推移が話題の中心となり、参加者自身がどのように捉えているのかについて、各自の意見を出し合った。米国側の参加者と我々を含めて20名余りであったが、その分、肩の力を抜いて、普段の会話に近い調子で討論をおこなったのは、ハーバードの時とはまた違った楽しさがあった。



UCLAにて発表する遠藤隆俊氏(右端)

* * * *

以上、個人的な感想をまじえながら述べてきた。長距離移動を伴いながらの16日間は、決して楽ではなかったが、それに見合うだけの収穫がある旅であったと思う。とくに今回は、討論やコメントにたっぷり時間がとられていることが比較的多かったため、相互賞賛の表面的・儀礼的な研究交流ではなく、また単なる顔見せ興行的なものでもなく、互いに突っ込んだ意見のやりとりがおこなわれた。真摯な議論が、研究を新たな次元へと展開させていくために有意義な示唆を与えてくれるものであることについて、大いに実感することができたように思う。

もちろん研究の発想のしかたで、部分的には相違を感じる部分もあったが、それ以上に共通した問題関心も見出すことができ、更なる討論へと足がかりをつかむことができたと言ってよいであろう。私自身も、ハイムズ氏からせっかくご意見や批判を直接いただいたわけであるから、今後、宋

代地域社会史研究を深化させていく上で、大いに活かしていきたいと考えている。

最後になったが、本企画を最初に提案され常に前向きに推進して来られた伊原 弘氏、煩瑣な事務処理を一手に引き受けられながら、いつも洒脱な電子メールで参加予定者たちを楽しませてくださった小島 毅氏、2つのシンポジウムを引き受けてくださったピーター・ボル氏とリチャード・フォン・グラーン氏、そして、有益なコメントをくださったロバート・ハイムズ氏に、この場を借りて心から感謝の意を表したい。また、ICANASのパネルに関してお世話になった東方学会の服部 正明氏、柳瀬 廣氏、河川英雄氏、原稿の翻訳や討

論の通訳のために多大な労力をさいてくださった吉田真弓氏、ペネロープ・ハーバート氏、通訳以外にも口頭原稿のチェックなどで私自身たいへんお世話になった秦 玲子氏にも、あらためて御礼申し上げます。

(和歌山工業高等専門学校 一般教育科)

【付記】 ICANASへの参加およびハーバード大学・UCLAでのシンポジウムは、鹿島学術振興財団・三菱財団の研究助成を受けておこなわれた。